

紺屋高尾

帝キネ時代映畫

原作並脚色者

高井清太郎

監督者

山下秀一

撮影者

池田千太郎

主要役割

職人 久造

嵐 狂藏

高尾太夫

久野あかね

職人 勇吉

林 誠太郎

ノロ竹

岩井 竹枝

紺屋七兵衛

市川 福十郎

久造父

喜多見 順

松平左京

青木 芳美

監者

嵐 廣二

解説 山下秀一氏の「三人吉三」に次ぐ監督

作品である。

略筋 紺屋職人の久造は生れてはじめて見た

吉原三浦屋の高尾太夫の美しさに魂を奪はれ、

假令一刻なりと共に語りたいたいの願つたが、

十萬石の格式ある全盛の花魁、及ばぬ戀と朋輩

の勇吉に脅されて思ひ歸らめやうとした。しか

し遊女の事故金さへあれば自由になるさ聞き、

また高尾の客松平左京が甘兩持つて来れば高尾

を取持つてやらうといつたのを眞に受け、以來

二ヶ年、久造は食へ度いものさへ喰はずに働き

続け、やう／＼甘兩の金を得た。飛ぶやうにし

て三浦屋へ上つたが高尾さばはる／＼語る暇が

なかつたので彼は涙を呑んで歸らうとした折、

久造の眞實に深く心を動かされた高尾は左京の

身請話を断つて久造の女房にならうと約し、五

十兩の金を與へて歸らせた。夢かさばかり喜ん

だ久造は、寝ても覺ても高尾の事のみ口走る

ので主人は氣が狂つたものと思ひ込み伯父を呼

んで國へ養生に連れ歸らせやうとした。所へ年

期も明けてすつかり人妻らしい姿になつた高尾

が訪れて来て人々の濡く中に目出度く祝言も濟

み、やがて若夫婦は店を譲り渡され、この江戸

中で評判となつて商賣は繁盛したさいふ。



寫眞 「紺屋高尾」帝キネ山下秀一作品。右より青木芳美と久野あかね。